

# 構造家・川口衛

## maiden work「原爆の子の像」台座

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco

### ■ 原点は思考

大構造家の生い立ちと趣味の民謡についての本コラムが2014年4月号。その後の先生御用達が半世紀という民謡酒場浅草追分での時間は最高です。2017年秋、川口衛先生に再インタビューの機会を頂いた。当日、覇志堂が期せずともっていたのが『原爆ドーム』（吉川弘文館、穎原澄子 著）。原爆の子の像（彫刻／菊池一雄）の台座の構造設計が川口衛と書かれている。構造家として初めて構造設計をし、世に出た作品がその台座である。

「構造設計の仕事に“駆け出し”はないと思っています」、「初めてとか、経験がないとか、そんな言い訳は無意味なのが“設計をする”という行為です」。

「駆け出し」という言葉に潜む、経験の薄い、慣れない、未熟な、という意味合いは、技術者として自らに許すべきでない。「言い方によっては不遜に思われる向きもあるだろうから、そこを正確に伝えて欲しい」と、電話でもおっしゃるのだった。初めて設計する者であろうと熟練者であろうと、担う仕事の責任は同じ。新米だからできが悪かったでは許されないのが構造設計という仕事なのだ。とことん思考を重ねて「原爆の子の台座」を設計したのが大学院2年生の時。それから数年で代々木競技場第一体育館の担当者となり、やり遂げた鋭意の構造家のmaiden work。プロフェッショナルとして貫いた精神は今以て少しも揺るがず。言うに及ばず現役なのです。

### ■ 予見の重要性

構造にとって計算は当然な技術的作業。小規模なシェル構造で、「原爆の子」は解析や計算に問題ない。重要なのは、「耐久性100年のフロンズ像を乗せることを考えると、台座の耐久性をどうクリアするかが問題でしょう?」。細い3本の脚が立ったままでコンクリートを流すとすると、コンクリートは柔らかいシャブコ

ンになるから耐久性などあったものではない。「そこで、脚を三つに分けて水平に寝かして工場で作るPCaとすることにした」。説明を聞けば誰でも納得する固練りの、強くて長持ちのする台座のつくり方。さまざまな予見を一つずつ解決して積み上げた結果であり、「若造が考えても同じことなのですよ」。決して施工者任せにせず、エンジニアがつくり方を示すことができ、てこそ施工なので模型をつくり続けてきた。「丹下さんとのシンガポール、磯崎とのバルセロナ。周りを説得するには模型が一番効率的」とも語る。

建築のつくり方を示すことで、施工者も余計なコストを見込む必要がなくなる。構造家とアーキテクトは一体化して、不確定要素をなくすスタディを繰り返すことが肝要なのだ。だから、国家的プロジェクトで図面だけを見てコンペ案を通した審査員や、そのため月並な競技場に変更されてしまった一連の流れに憤る。すべての予見ができてこそ建築家なのだ。

### ■ 発想のフレキシビリティ

頭脳明晰さは、記憶力も含めて自主的なトレーニングの効果が大きいと。受け身の若者をつくっている現在の教育を憂慮し、講演会では自作のビデオ「発想のフレキシビリティ」で一石を投じる。2002年に建築家・磯崎新からセラミックパークMINOで、「屋根フレームから吊って大空間の中に浮いている展示室をつくりたい」と相談を受け、並振子の可能性を提案・実現したと語る。実はインタビューの後、大構造家直々にこのレクチャーを、覇志堂と30分受けた。

「台座」の脚を水から守るステンレスの沓も、柔軟な発想から来ている。頂戴した力強いお便りの行間には川口衛先生の建築魂が潜んでいるようだ。

